

女性の年齢による認知機能の変化

－閉経およびホルモン補充療法との関連－

保健学専攻看護学分野

学生氏名：莎如拉

指導教員：中塚幹也

キーワード： 認知機能 更年期 閉経 女性ホルモン

【緒言】日本人の平均寿命が延長し高齢化が進むとともに、今後、認知症患者の数は増加し続けると考えられる。国際アルツハイマー病協会 (Alzheimer's Disease International:ADI)によると、日本の認知症患者数は2020年には260万人、2040年には370万人にまで増加すると予測している。認知症患者の増加にも関わらず、認知症の原因は明らかにされておらず、発症した場合の明確な治療法はない。認知症発症の予防対策が望まれているが、そのためには認知症のリスク要因の把握や、その前症状を見つける必要がある。認知症の前段階の状態としては、Reirbergらが1988年に軽度認知障害 (Mild cognitive Impairment : MCI) という概念を提唱している。Petersenは1991年にMCIの概念を「高齢になるとみられる生理的なもの忘れと脳の器質的な病変によって引き起こされる認知症との境界にある、軽い認知機能の障害である」と報告している。しかし、どのような背景因子が認知症の前段階の発生に関与するかは、依然として解明されていない。女性においては更年期に大きな内分泌学的変化があることから、卵巣機能低下に伴う種々の身体症状や精神症状に関する研究は多い。しかし、閉経後女性のこれらの身体症状や精神症状と認知機能の低下との関連についての研究は少ない。今回の研究では、日本人女性の加齢に伴う認知機能の低下を調査するとともに、閉経後の女性の背景因子と認知機能の低下との関連を検討したので報告する。

【方法】2007年1月～9月に倉敷成人病健診センター「女性・漢方外来」を受診し、同意の得られた30歳以上80歳未満の女性360名に対し、タッチパネル式物忘れ相談プログラムMSP-1000(日本光電社、東京)を実施し、12点以下(15点満点)であった「物忘れが始まっている可能性がある」症例を除外した216名を対象とした。クーパーマン更年期指数表、Cornel Medical Index (CMI)健康調査表、認知機能調査として、5分野(「記憶」、「言語」、「注意」、「思考」、「見当識」)、21項目の自己記入式調査表(高スコアほど認知機能が低下)を配布し、回収箱を設置し自己投函によって回収した。

【結果】

1. 年代別にみた認知機能低下スコア

認知機能低下スコアの総スコアを年代別にみると、30代と40～50代と60代の間でスコアが段階状に上昇しており、30代と60代の間に有意差を認めた。「記憶」分野を年代別で比較すると、最も高いスコアは60代の 9.1 ± 4.1 、次いで70代の 8.9 ± 4.2 であり、この

2群は30代と比較して有意な差を認めた。「言語」分野を年代別で比較すると、最も高いスコアを示したのは60代の 5.4 ± 3.0 で、30代の 3.3 ± 2.7 との間に有意差を認めた。

2. 閉経女性における各種背景因子と認知機能との関連

対象者のうち閉経している者は109名(53.2%)であった。この109名について背景と認知機能の関連を検討した結果、背景因子10項目のうち「合併症あり」、「ダイエット経験あり」については認知機能が低い傾向を認め、「習慣的な朝食の欠食あり」については有意に低スコアであった。

3. 閉経女性におけるクッパーマン更年期指数、CMIと認知機能の関連

クッパーマン更年期指数で表される更年期症状のスコア、また、神経症の指標であるCMIで評価される身体症状、精神症状のスコアと認知機能の総スコアとの関連を見たところ、正の関連が見られた。

4. 閉経女性における不定愁訴、ホルモン補充療法と認知機能との関連

閉経女性を「不定愁訴なし、ホルモン補充療法なし」、「不定愁訴あり、ホルモン補充療法なし」、「不定愁訴あり、ホルモン補充療法あり」の3群に分けて検討したところ前2群間では認知機能に有意差は見られなかった。しかし、後2群を比較した結果、「不定愁訴あり、ホルモン補充療法あり」では、認知機能低下スコアの総スコア、「記憶」分野のスコア、「言語」分野のスコアが有意に低値であった。また、更年期症状が強くホルモン補充療法の適応となるクッパーマン更年期指数が中等・重症である女性のみで検討してみても、ホルモン補充療法を施行していた女性では、総スコア、「記憶」分野のスコア、「言語」分野のスコアは有意に低値を示し、「注意」分野のスコアも低値の傾向が見られた。

【考察】認知症を発症していない女性を対象に、認知機能をスコア化し年代別に検討したが、40代以降で明らかに認知機能低下スコアの上昇が見られ、40~50代、すなわち更年期に一致して認知機能低下が起きている可能性が示唆された。また、60代には認知機能スコアはさらに上昇していた。この認知機能の低下していくパターンは、認知機能の分野ごとに異なっていた。これらのことから、認知機能の低下を早期に発見するためには、分野ごとの認知機能のスコアに注目して少なくとも30代から認知機能をチェックし、更年期、さらに閉経後も定期的チェックが必要である。年齢の要因が影響した可能性も高いが、高血圧、高脂血症、糖尿病などの合併症を持つ女性では認知機能低下が見られ、動脈硬化など血管障害が関与している可能性がある。また、ダイエットの既往も認知機能低下に関与しており、不適切なダイエットによるやせ、その後のリバウンドによる肥満などの状態は、一過性のみならず持続した認知機能の低下に関与するとも考えられる。今回、クッパーマン更年期指数、CMIのスコアと認知機能スコアが関連していることが明らかになり、また、女性ホルモン補充療法を施行した女性では認知機能の低下が少なかった。このような女性ホルモンと認知機能の関連についても、今後、症例数を増やして検討する必要がある。

【結論】女性の認知機能の低下を年代別に検討した結果、40代ではすでに低下していることが明らかになった。このため、認知機能低下を早期に発見するために若年者から経時的な認知機能のチェックが必要である。また、認知機能の低下を予防するため生活習慣病への対策、正しい食習慣の啓発も必要である。また、更年期においてはホルモン補充療法が認知機能の低下を予防する可能性があり、今後も検討をする必要がある。